

夜のピクニック

2006(平成18)年9月30日鑑賞(梅田ピカデリー)



監督=長澤雅彦/原作=恩田陸『夜のピクニック』(新潮社刊)/出演=多部未華子/石田卓也/郭智博/貫地谷しほり/西原亜希/松田まどか/柄本佑/高部あい/加藤ローサ/池松壮亮/南果歩(ムービーアイ、松竹配給/2006年日本映画/117分)

……第2回本屋大賞を受賞した原作者恩田陸が、母校の「歩く会」をテーマとして描く高校生たちの群像劇だが、テーマは単純そのもの。一昼夜24時間かけて80キロメートルを歩く中で生まれてくる「特別なもの」とは一体何……？そしてヒロインが秘かに胸に秘めた1つの賭けとその成否は……？わかりやすい映画そして優等生ばかりが登場する映画だが、さて、こんな映画に対して今どきの高校生の反応は……？

「本屋大賞」の価値は……？

「本屋大賞」とは全国の書店員がいちばんお客に薦めたい本を投票で選出する賞で、第1回(2003年)は小川洋子の『博士の愛した数式』だった。そして、その第2回(2004年)受賞作が恩田陸の『夜のピクニック』。ちなみに、第3回は今年4月5日に発表されたが、リリー・フランキーの『東京タワー ～オカンとボクと、時々、オトン～』が受賞した。恩田陸は、青春小説からSFまで多くの作品を世に送り続けている作家とのことだが、私はそんな彼女の本を1冊も読んだことがない……。

直木賞や芥川賞などの賞選びは、それなりの選考過程を経て、最もふさわしい作品が選ばれているものと一応「信用」しているが、「本屋大賞」ともなれば、その選出はかなりいい加減で、流行に左右される面が強いはず……。したがって、私はその価値に多少疑問を持っているが……。

歩行祭とは？

「夜のピクニック」は、原作者恩田陸の母校茨城県立水戸第一高等学校で1949年から現在までずっと「歩く会」という名前で行われている伝統行事。この映画における「北高歩行祭」は、80kmを一昼夜24時間かけて歩くもので、60kmまでは1000人一緒に並んで歩く「団体歩行」、そして残り20kmは、友人や好きな人と思いい思いに歩く「自由歩行」とされているが、ホンモノは、前半45kmは「団体歩行」で、後半25kmは「自由歩行」によって、全70kmを全校生徒で歩き通すとのこと。

「1000人いれば1000通りの達成感がある」というのが「歩く会」の謳い文句だが、映画の中では「いつまでこんな時代錯誤の行事をやっているの……？」との批判的セリフもあり、賛否両論……？ いやいや、そんなことはない！ パンフレットにある「卒業生が語る」を読んでも、また私の年齢と同じ57年間も関係者の協力を得ながらこの行事がずっと続いていることを見ても、反対論はごく一部で、賛成論者が圧倒的に多いのでは……？

女の子同士の友情も結構強固……？

この映画から見る限り、高校生の女の子同士の友情も結構強固なものであることがわかる。そんなことを暗示させるのが映画の冒頭、甲田貴子（多部未華子）、遊佐美和子（西原亜希）、榊杏奈（加藤ローサ）の3人が草原の上に寝そべって、「並んで一緒に歩く。ただそれだけなのに、どうしてこんなに特別なんだろう」といいながら、微笑みあうシーン。この映画の主張は、ここにすべて凝縮されている。

貴子と美和子は3年生になって3組と7組に分かれ、さらに杏奈はニューヨークに転校してしまっただが、貴子と美和子の友情はなお固いうえ、最後の歩行祭に向けて貴子に送られてきた杏奈からの手紙が単調になりがちな歩行祭の物語に1つのミステリー性(?)をもたせる役割を担っている。さて、その手紙の内容とは……？ そして、その手紙の予言(?)は、果たして当たるのだろうか……？

貴子と融は異母兄妹……

80kmを歩くだけの歩行祭をテーマにした映画にストーリー性をもたせているのは、3年生になって同じクラスになった貴子と西脇融（石田卓也）が父親を同じくする異母兄妹だということ。俗っぽく言えば、妻の生んだ男の子が融であるのに対し、不倫関係（？）にあったキャリアウーマン（南果歩）が生んだ女の子が貴子だということ。それが、いつ、どのような形でバレたのかについて映画は多くを語っていないが、中学生になった子供たちがそのことに気づいたのは、父親の葬儀の席。もちろん、このことは本人たちはわかっている、クラスメイトたちは誰も知らないこと……？

そんな2人が互いにわだかまりを持ち、ギクシャクした関係にあったのは当然だが、実はそれがこの映画に唯一のストーリー性をもたせているテーマ。そして今、貴子は人知れず「秘密の賭け」を……。それは、それまで1度も話したことのない融に対して思いきって話しかけること。さて、その賭けの行方は……？

互いに意識する2人は……？

この2人はたまたま同じ北高に入学したものの、心の中にわだかまりをもっているため、互いに意識しながらも口をきかないまま。高校3年生となり同じ3年3組になっても、互いに口をきかないというのは不自然そのものだから、クラスメイトたちがそれを「互いに好きなんだ」とカンぐったのも当然……。したがって、融の親友の戸田忍（郭智博）も貴子の親友の美和子も、さらにクラスメイトの後藤梨香（貫地谷しほり）、梶谷千秋（松田まどか）、高見光一郎（柄本佑）たちも、今回の歩行祭が告白の絶好のチャンスとばかり、2人をはやし立てたが……。

キーマンは杏奈の弟

この映画でキーマンとなるのは、歩行祭への参加資格がないくせに、神出鬼没の行動で融や貴子たちに接触してくる杏奈の弟の順弥（池松壮亮）。家族はみんなニューヨークに移ったのに、なぜ順弥だけが日本に残っているのかよくわから

ないが、それは本筋とは関係のない話……。彼が接触してくるのは、姉が好きだった男が誰なのかを確かめたいという単純な好奇心から……。決してその人の名前を明かさなかったという杏奈だったが、いくつかのヒントは順弥も聞いていた様子。したがって、そのヒントを頼りに盛んに探りを入れてくる順弥に対し、3年生の諸君たちもわかることは答え、協力していたが……。

この順弥を演じる池松壮亮は、『男たちの大和／YAMATO』（05年）、『UDON』（06年）に続き、来春公開の『蒼き狼～地果て海尽きるまで～』でチンギス・ハーンの少年時代を演ずるという、1990年生まれの注目株で、演技力はしっかりしたもの。このキーマンの働きによって、80kmを完歩した融や貴子たちのフィナーレはどのようなものになるのだろうか……？

2006（平成18）年10月2日記

ミニコラム

愛光学園の伝統行事は？

愛媛県松山市にある私の中学高校時代の母校愛光学園は、02年に創立50周年を迎えたのを機に、中高一貫教育の男子校から男女共学へと大きく方向を転換した。これは少子高齢化という時代の流れの中、優秀な生徒を男子に限らず女子にも求めていくべきという合理性が生んだ必然であり、これによって得られるメリットは絶大なもの。他方、共学制実施によって失ったのが、茨城県立水戸第一高等学校で1949年からずっと続いている「歩く会」と同じように、1952年の創立以来愛光学園の伝統行事として続いていた中間体操。これは、午前中4コマの授業の中間に、全校生徒をグラウンドに駆り出して行わ

れるランニングと体操を指すもので、別名「裸体操」。すなわち、真冬の寒風が吹きすさぶ中でも、教員と生徒全員が上半身裸となって行われる体力づくりと精神的鍛練を目的とした行事。しかしこれは、男女共学になれば必然的に廃止されることに。

この中間体操のおかげか、私は弁護士生活33年、満年齢58歳にして未だ1度も入院の経験がない。今も続いている日曜日毎のフィットネスクラブでの20km走は、あの愛光時代の裸体操の延長線……？ そう考えれば、我が母校の伝統行事に感謝しなければ……。

2007（平成19）年3月8日記